

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」
2013年度第2回研究会（通算第6回）

日時：2013年11月10日（日）13:00～18:30

場所：本郷サテライト7階

(1) 齋藤剛（AA 研共同研究員，神戸大学）

「ムフタル・スーフィーとロベール・モンターニュ：モロッコにおける地域をめぐる
二つの眼差し」

(2) 深山直子（東京経済大学）

「都市を先住化する—ニュージーランド・マオリの事例から」

*概要

齋藤氏の発表は、モロッコ研究における人類学的空間構想力に関わるものだった。特に近年現地で見られるマドラサ復興を理解する上で、モロッコのイスラーム的知的伝統と人類学の研究史を踏まえることの必要性が述べられた。特にタバカートという列伝方式の記述が20世紀中葉の現地知識人ムフタル・スーフィーの地域情報に関わる関心の様式と、19世紀植民地期のモンターニュさらに20世紀のE. ゲルナーによる動態論的部族論とこれを批判するかたちで定着化した歴史学的アプローチの様式が対立的に提示された。このことでモロッコで調査する人類学者が現地と人類学の知的伝統を駆使する形で、フィールドを理解していることが明らかになった。深山氏の発表は、ニュージーランド・マオリ研究に関わる研究史とそこを踏まえてどのような今後フィールド調査が可能であるかを探求するものだった。特に興味深かったのは、ニュージーランド社会におけるマオリ研究の位置づけの詳細が明らかにされ、同時に先住民としてのマオリがニュージーランド社会においてどのような位置づけにあるかが明示されたことである。そのことで、フィールドワークという方法でマオリ研究を行うことの困難さと、従来とは異なる新たなアプローチが必要であることが提示された。

*各報告要旨 以下は例

(1) 齋藤剛 (AA 研共同研究員, 神戸大学)

「ムフタール・スースィーとロベール・モンターニュ：モロッコにおける地域をめぐる二つの眼差し」

本発表は、人類学とイスラーム的知の伝統という二つの知の潮流に見いだされる対照的な地域へのアプローチに注目をすることによって、モロッコ研究における人類学的空間構想力の特質の一端を明らかにすると同時に、それらの地域観の現地における継承の様相を明らかにすることを目指したものである。

発表では、モロッコにおけるフランス植民地人類学者の頂点に位置すると目されるロベール・モンターニュ (1893-1954) と、現代モロッコにおける最高の知性との評判が高い伝統的宗教知識人ムフタール・スースィー (1900-1963) という、ほぼ同時代にモロッコ南西部スース地方と関わった二人の知識人に注目をし、彼らの知的伝統の系譜を明らかにした。そのうえで、彼らの知的伝統が、北アフリカにおける先住民運動として知られるアマズィグ運動と、スース地方における伝統的イスラーム教育の復興を目指すマドラサ復興という二つの異なる潮流に継承されていること、とくにアマズィグ運動において新たな故郷概念が形成されていることを明らかにした。これらの作業を踏まえて、現地社会において形成された地域観と人類学的な地域理解の相互関係にも目を向けた。

(2) 深山直子 (東京経済大学)

「都市を先住化する—ニュージーランド・マオリの事例から」

ニュージーランドでは 1980 年代から、部族集団が植民主義的収奪をめぐる、訴訟活動と政治交渉、さらに政府との和解に伴う大規模資産の所有・管理の単位として、組織化・法人化を果たしてきている。このいわゆる再部族化という動向は、「伝統」の再構築を目的とした研究の進展を伴って、部族集団に所属しないマオリを周辺化すると考えられる。周辺化されたマオリは、都市を中心に、地縁と相互扶助の必要性に基づいて緩やかにまとまるマオリ・コミュニティを形成したり、集団やコミュニティとは無関係にオルタナティブな「マオリらしさ」を主張したりしている。都市は、これら部族集団、マオリ・コミュニティ、マオリ個人が集まって、異なる手段を用いて重層的に先住化する空間と捉えるべきであろう。